



ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roding)

(目八) 文蛤・浜栗



写真左：多摩川河口（2005年7月）（殻長94.4mm）。このタイプのハマグリは、近年まったく採れていない。

写真右：近年採れているハマグリのタイプ。疑念はあるがハマグリとして扱う。

熊本県産等の表示で市販されているのも写真右のタイプ、商品名は「はまぐり」として販売されている。なお、本種については「タイワンハマグリ」「シナハマグリとの交雑種」

等々多数の意見があるが、結論は得られていない。

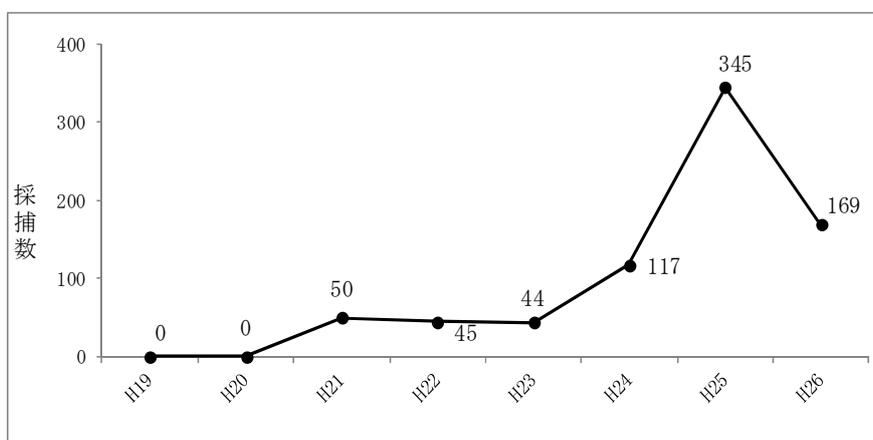
◎ 同定の手引き（櫻井欽一 1988年 相模貝類同好会報 22）

ハマグリ：中型、前縁短く、後縁は長くて直線的で殻は後方に延びる。腹縁は丸くやや張り出す。色彩、斑紋は変化に富む。外套湾入広いが浅い。分布、北海道南部～九州。淡水の混入する内湾の干潟～水深 20m くらいの砂泥地に生息する。

タイワンハマグリ *Meretrix neretrix* LINNAEUS：中型、ハマグリに似るも前後縁ならびに腹縁も良くふくれ、かつ、あまり後端に延びず全体として円みが強い。左右のふくらみはハマグリより強く、巾と高さの比は 0.64% で、ハマグリの 0.57% より大である。外套湾入は広く浅い。帯黄白色、帯褐灰色のものが多く、時により小斑紋をちらす。分布は沖縄、台湾ほか西太平洋の潮干帯から水深 20m くらいのところに生息する。



色彩変化は、幾つかのタイプに分けられるが、近年は黒色のものが増加傾向にある。

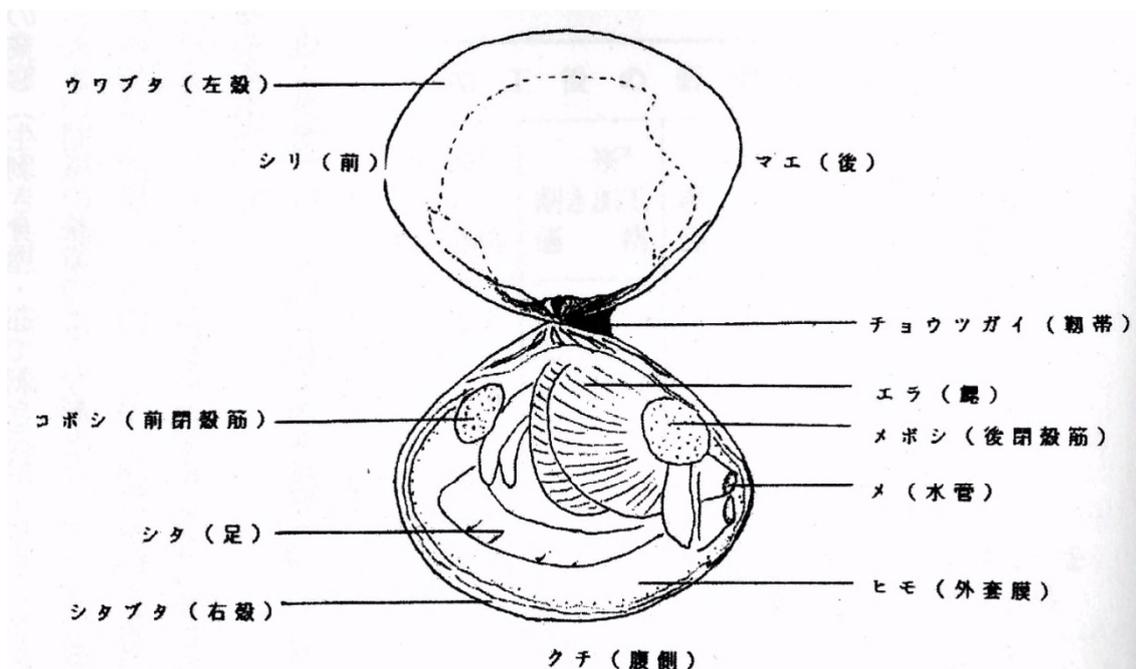


貝桁調査におけるハマグリ採捕数の推移（三枚州）

本協会（内湾環整協）は、1986年から1996年の11年間に有明湾より22トンのハマグリを放流した。以後放流種苗が入手出来ず、2001年に再度2トンを放流した。この間、放流効果は見られなかった。散発的に採れていたシナハマグリが姿を消し、2009年からハマグリが採れ始め2012年以降増加傾向にある。2013年の貝桁網調査による二枚貝の採捕状況は、17種類（20,372個体）で、内訳はホンビノスガイ53.0%、アサリ25.7%、シオフキ9.6%、サルボウ6.7%、ハマグリは17.0%であった。

山川彩子（沖縄国際大学講師）は、葛西人工海浜で、ハマグリのミトコンドリアDNAを調べたところ、62個のうち6個が台湾の在来種であった（朝日新聞2014年1月14日）。ただし、貝殻を見て、種類の判別ができないとなると、これも問題である。

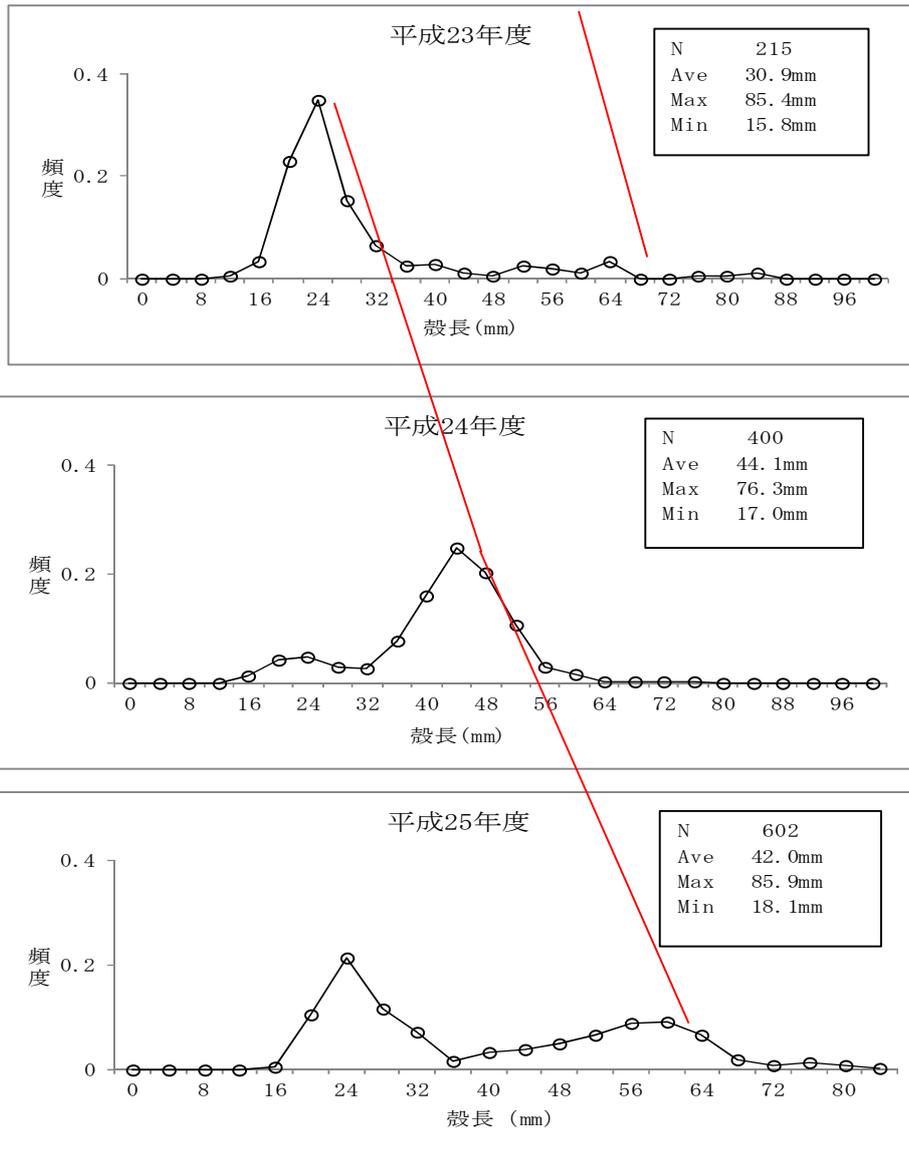
ハマグリの解剖図



各部名称のカタカナは業界用語、その後のカッコ内は学術用語
 (内湾環整協 2003年 江戸前貝類漁業小史)

ハマグリの成長

産卵期は6~10月、盛期は8~9月。成長は1年で殻長20mm、2年で40mm。生息場所は、内湾の河川の河口に近い塩水と淡水の混じりあったところ。このような場所で育ったハマグリは、肉が白色で柔らかくて大きい。他方、塩分の高い場所で育ったものは、肉が赤黄色で脂肪が多く硬い。水温が低下すると、二枚貝は砂中に潜り越冬するが、ハマグリは、海底から50~80cmの深さに潜るとの漁業者の話がある（掘田吉雄 1991年 蛤の話 光出版 松阪）。

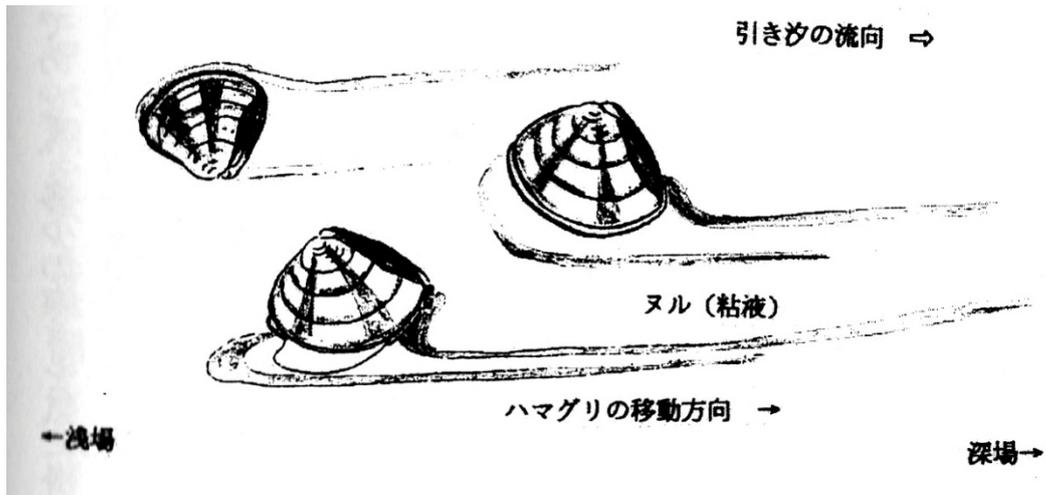


ハマグリ殻長組成の経年推移（赤線は成長を示している）

ハマグリの集団移動

ハマグリ漁場での観察（東京大森地先、1930年頃まで毎年）。大潮時、直径1cmほどの半透明で紐状のぬるぬるした粘液（通称ヌル）を長く出して、貝が横になった状態で、ヌルが下げ潮の流れに乗って沖に流れるのに引っ張られるように流れ出していた。この移動は水深5～10cm位で、潮の流れが速い時に盛んに移動した。ハマグリの繁殖の良かった頃は、この移動も頻繁に見られ、海底がヌルで一杯になった。移動の範囲は大潮時に干上がる浅い場所から深みへの移動で、それほど沖には流れ出なかった。そして、ここで落ち着いたものが、後に中玉、大玉に成長した。

*内湾環整協 2003年 江戸前貝類漁業小史



引き潮に乗って移動するハマグリ（内湾環整協 2003 年 江戸前貝類漁業小史）。
 本図は奥谷喬司（2003 年 軟体動物二十面相 東海大学出版会）に引用されている。

江戸時代の名物「羽田蛤」

江戸時代桑名の蛤は名産で、広く知れ渡っていた（東海道中膝栗毛 1802 年～1809 年頃の記述 十返舎一九作）。しかし、桑名に対抗する名産地が江戸にあった。村尾嘉陵の「江戸近郊道しるべ」（1807 年～1834 年頃の記述）は、羽田の茶店ではハマグリを蒸したものを売っているが、その味わいは、さっぱりしてじつに美味しいと、羽田名産のハマグリが激賞されている。

郵便切手「ハマグリ」

日本では貝の郵便切手は少ないが、内湾に生息する種類ではハマグリとバイ（80 円切手 1988 年）及び「奥の細道シリーズ第 10 集」（62 円 1989 年）の切手が発行されている。



写真左：1989 年 5 月 発行。「奥の細道シリーズ第 10 集」ハマグリと見分けにくい。
 『蛤の ふたみに別 行秋ぞ』（芭蕉）
 写真右：2013 年 5 月 発行。「自然との共生シリーズ第 3 集」日本の希少野生動物。
 ハマグリが希少野生動物に選ばれている。

貝覆い（貝合わせ）

貝覆いは、貝合わせから発達したもの、現在のトランプの神経衰弱のような遊び方。



写真左：奈良にて購入、殻に直接描いたものではなく、紙を貼った様子、少々がっかりしたが、作り方を調べると内面に紙を貼り描いたとの説もある。

写真右：相模貝類同好会講習会 1977年(西村健 作)



展示会パンフレット(冷泉家時雨亭文庫)

蛤石・蛤塚

江戸時代初期、日比谷の入江から埋め始めた工事が築地の地で、何度堤防を築いても波にさらわれてしまう。そんな折、海面に光輝くものがあり、取り上げてみると、稲荷大神のご神体、社殿を作り祭ったところ工事進展、埋め立てが成る(波除神社 1659年)。

築地場外市場のはずれにあるこの境内に蛤石が祭られている。鮫鱈塚、活魚塚に埋もれるような蛤の形の石(大きさ50cmほど)で説明文も見当たらず、極めて地味な存在。

江東区住吉駅前の料亭の一角に蛤塚がある。江東区は松尾芭蕉が元禄2年(1689年)奥の細道の旅に出発した地として芭蕉稲荷、芭蕉記念館、深川芭蕉通り等がある。2,400歩いた旅の終着地である岐阜県大垣市の「住吉公園」内に芭蕉句碑が建っている。碑文は切手の項で記述した蛤の句であるが、芭蕉にちなみ、共通する「住吉」という地名から、江東区にも蛤塚をつくったのではないかと思われる。



写真左中：波除神社と蛤石



写真右：江東区住吉の蛤塚

(蛤町)

江東区には深川蛤町一丁目（現：永代二丁目）、深川蛤町二丁目（現：門前仲町一丁目、二丁目）の町名があり、町内には蛤の貝殻を敷いた道路があったと言う。町名は徳川三代将軍家光が隅田川を訪れた折、地元の者が蛤を献上したことによる。関東大震災後、昭和6年(1931年)に町名変更した（江東区史 1997年 等）。

(蛤御門)

京都御所の西側にある門の名前、元治元年(1864年)、「禁門の変」「蛤御門の変」。門の名前の由来は、天明大火の後、寛政2年(1790年)に新たに開かれた門ということで「焼けて口開く蛤御門」と京童の言。

ヒメシラトリ *Macoma incongrua* (Martens)



ニッコウガイ科 殻長 3cm。殻は卵型でふくらみは弱い。殻頂付近がオレンジ色、殻表には灰褐色の薄い殻皮がある。内湾奥部の泥底に生息。水管が長い。分布は九州以北。